

シンポジウム B

話題提供 ②

子どもたちの16年——阪神・淡路大震災の経験から

中溝茂雄（神戸市教育委員会事務局 指導課長）

神戸市では平成7年（1995）1月に起きた阪神・淡路大震災によって、市立学校・園だけでも179名もの子どもたちの尊い命が奪われた。喪失体験や恐怖体験、不自由な避難生活等は、子どもたちに精神的な影響を与え、「心のケア」が必要となるケースも多かった。

平成7年度には、心のケア担当教員として77名（神戸市）の「教育復興担当教員」が全国で初めて配置された。「教育復興担当教員」はピーク時の平成10～12年度には139名にも及び、配置は21年度まで継続された。

その業務は、被災児童生徒の心のケア全般（教育相談、保護者等との連携）だけでなく、当初は避難所の運営支援や転出入児童生徒の対応なども行い、教育活動正常化に向けての業務、防災教育の推進、記録集や作文集等の制作、学校防災体制の整備・充実など、多岐にわたった。さらに、PTSDの発症や仮設住宅等からの遠距離通学によるストレス、就学援助の増加など子どもに関する様々な課題が発生し、各学校とも手探りのなかでの対応が続いた。

平成9～12年度になっても、厳しい経済状況、生活環境の変化に戸惑いをみせる子どもたちが多く、教育的配慮を要する児童生徒はさらに増加していた。問

題行動も増えていた。また、フラッシュバックを起こす子どもたちもおり、防災教育の実施についても細やかな配慮が必要であった。

平成12年度以降は、経済状況のさらなる悪化に加え、生活環境の変化（恒久住宅への転居など）の影響もあり、子どもたちの抱える課題は見えにくくなる傾向が進んだ。精神的安定の基盤となる「温かな家庭環境」とは、ほど遠い現実があった。復興担当教員は「被災地」から「復興住宅」の多い学校へと配置転換となり、スクールカウンセラーの全中学校配置（小学校へも派遣）も行われた。なお、震災直後の混乱の中で乳幼児期を過ごした子どもたちへの影響は、現在の中学生にまで続いていると考えられる。

—プロフィール—

中溝茂雄（なかみぞ・しげお）

1980年、神戸大学教育学部卒業。同年4月より神戸市中学校理科教員。1995年（平成7年）1月、神戸市立鷹取中学校で震災を経験し、避難所担当教員として避難所運営に携わる。同年4月より教育復興担当教員として鷹取中学校で12年目を迎える。平成8年度より神戸市教育委員会事務局で防災教育担当指導主事として、復興担当教員の取りまとめ、防災教育副読本・カリキュラムづくり、修学旅行生向け・教育視察団向けの語り部派遣等を担当。平成21・22年度、神戸市立長田中学校長。平成23年度より現職。

